



『わが星』は演劇か？

柴幸男

演劇とは何かをずっと考えています。思えば、それだけを考え続けてきたように思います。これからもそれだけを考え続けるのかもしれない。

2015年、3度目の上演となる『わが星』の稽古は佳境を迎えています。残り時間は少なくなってきましたが仕上がりは良い感じですよ。

今回の稽古場ではストレッチをよくやっています。稽古の始まりは全員共通のストレッチから。もうみんないい年ですし、力や気分で乗り切れるものでもありません。初演から6年が経ち、結婚したり、子供を産んだり。変化していく自分とどうつきあっていくのか、変化していく自分は演劇とどうつきあっていくのか。これもずっと考えていることです。

今回取り組んでいるストレッチは肉体的なものだけではありません。精神的な、演劇的なストレッチも常に行っています。特に演劇の筋肉は固まりやすいものです。目指しているのはしなやかで柔らかい筋肉です。

音楽を使用しない稽古を繰り返してきました。演技を一つずつ確認するように丁寧に稽古しました。こう書くとき当たり前のことですが、それが『わが星』という作品に関して当たり前ではないような、そんな感覚に陥ってしまいました。『わが星』は音楽と不可分だと、考えていました。しかしそれは思い込みでした。演技の確認をゆっくりと行うことでそれが分かりました。作者でも思い込みで固まる。むしろ経験者ほど凝り固まる。そんな固まっていた思考を、演技をゆっくりとほぐし、自分たちが自在に動く楽しみをあらためて確認する。これこそ演劇をつくるという行為だと、味わいながら稽古を続けています。

最近、演劇をつくることよりも楽しいのです。ようやく演劇のつくり方が少し分かってきた、そう思います。

演劇が生まれる瞬間

話は変わりますが、昨年から名古屋の外国語大学で授業をしています。演劇を一度もしたことがない、今後もおそらく演劇をしない、そんな若者たちと演劇をつくる授業をしています。彼らの中に初めて演劇が生まれる瞬間を、0が1になる瞬間を、僕は目の前で何度も見ました。その時僕はなんとも言いようのない気持ちになります。もしかしたら幸せなのかもしれません。

3月に北京の高校生たちとワークショップをした時にも同じような気持ちになりました。彼らもまた演技の経験はありませんでした。これは後で知った

ことですが、中国の高校には基本的に部活がなく、同年代で何かを創作する機会自体がありません。そんな彼らと20分ほどの短編劇をつくりました。『あゆみ』という作品を彼らと一緒に彼らの言語でつくったのです。彼らが自由に演劇をする瞬間、演技をする仲間を見る姿勢。言語を超えた行為の中で、演劇の醍醐味を僕はまた味わっていました。

そういった自由を獲得する行為こそが演劇なのではないかと考えています。不思議な話だと思います。演劇をする人間は一見、不自由に見えます。せりふが決まっています。演技をする場所が決まっています。他人が存在します。それだけが勝手な振る舞いをします。だけど、そのおかげで、自分が気が付くことができる。そして、変化することが出来る。その気付きと変化こそが自由を獲得することだと僕は思うのです。

観客は演劇の何を観ているか
演技をすること、演劇をつくること、それは自由をつくることかもしれない。では観客は演劇の何を観ているのでしょうか。何が観たくて観客は演劇を観るのでしょうか。演劇の何を観て僕たちの心は揺さぶられるのでしょうか。これもずっと考えていることです。物語ではないと考えます。もしそれが物語だとしたら、同じ

作品を何百年も僕たちは観続けないと思うのです。それは人間ではないか、と僕は考えます。もしかしたら自由な人間を僕たちは観たいのではないかと考えています。今、目の前で演劇をする人間、演劇をつくっている人間は、俳優であり、物語の登場人物であり、自由を獲得した存在であり、人間から自由になった存在に、僕には見えます。そんな存在を僕たちは観たいのではないか。アスリートを見る眼差しにも近いものを感じます。人間であり自分でありながら、それらから自由になりたいとどこかで考えている。だから、それを観せてくれる演劇を観に行くのではないか。

僕が演劇をつくり続ける理由もそこにあるのかもしれない。演劇をつくらせている瞬間だけ、僕は自由になることができる。誰かの中に演劇が生まれた瞬間は、思わず見とれてしまうほどに自由である。これを忘れない限り、『わが星』は演劇であり続けると思っています。何カ月公演を行おうが、常に新鮮に演劇を瞬間的に創作し続けることができると思います。それを多くのお客さんにも体感してほしい、体験してほしいと思います。僕が、誰よりも『わが星』の演劇を楽しみにしているのかもしれない。演劇が生まれる瞬間をぜひ一緒に目撃してください。



2015年の『わが星』衣裳スケッチです。衣裳担当の藤谷香子さんが描いてくれました。



小豆島高校吹奏楽部の皆さんとのワークショップ風景。大柿友哉さんの指揮。三浦康嗣さんのギター。



□□『○○○○』の演奏と録音をしました。この小豆島高校の体育館で7月に公演を行います。



北京で行ったワークショップ風景。外国語を勉強している高校生たちの見えない縄跳び。



北京の高校生たちとは『あゆみ』をつくりました。野良犬を捨てられなくて悩む、あゆみ。

2015年版

『わが星』はここに注目!

今回が3回目の上演となる『わが星』。
初演・再演を観た人も未見の方も、
2015年版『わが星』のココがポイントです!

アフタートーク & イベントを check!

2

2015年版『わが星』は、アフタートークのゲストが実に豪華。“星の誕生”が研究テーマの天文学者・平松正顕(19日 19:30の回)、“宙ガール”として天文ラジオ番組のパーソナリティーも務めるアーティストの篠原ともえ(20日 19:30の回)、日常の見慣れた事象を独自の“見立て”によって捉え直すアーティスト・鈴木康広(21日 14:00の回)、ヒップホップ・グループRHYMESTERのラッパー・宇多丸(21日 19:30の回)と、それぞれどんな話が飛び出すのか、4日とも見逃せません! さらに22日 19:30の回は、□□□ feat. OUR PLANET CREWのミニライブも。一度とならず二度、三度と劇場に足を運びたいくなるラインアップです。



平松正顕



篠原ともえ



鈴木康広



宇多丸



□□□

新キャストを check!

1

『わが星』は、キャストの一体感も魅力の一つ。その“輪”に新たに加わるのが、先生役の寺田剛史とお婆ちゃん役の山内健司です。寺田は北九州の人気劇団・飛ぶ劇場の看板俳優。柴作品は北九州芸術劇場プロデュース『テトラポット』(12年)で経験済みです。一方、山内は青年団に旗揚げからかわり、国内外の舞台で活躍するベテラン。初参加の二人が、2015年版『わが星』にどんな光をもたらしてくれるのか、注目です。



寺田剛史



山内健司

小豆島公演を check!

3

2015年版『わが星』の大冒険の一つが、香川県立小豆島高等学校 体育館特設ステージでの公演です。ままごとと小豆島とのかかわりは、本紙でもたびたびご紹介してきましたが、今回の『わが星』小豆島公演が、これまでの島での活動の、一つの集大成になります。ままごとは、同校の吹奏楽部部員たちにも音楽を通じて公演に参加してもらいたいと考え、4月に島でワークショップを行いました。その成果は、7月の公演でぜひお確かめを。東京で観るのとは全く異なる『わが星』になることは間違いないので、ぜひ小豆島にお越しください。

☑ 私のオススメ

端田新菜



わが星のメインビジュアルは、小豆島の星空と、港です。神戸・高松からの船着場である坂手の港を、たくさん坂を登ったところにある農道から、写真家の濱田英明さんが撮影された作品です。ままごとがこの3年間滞在させてもらっていたのも、坂手の町。私たちがたくさんの細い路地を抜け坂を登って、そこからただ、海を眺めていました。

「スイッチ総研」、

ままごと劇団員の大石将弘が、俳優・光瀬指絵と新ユニット「スイッチ総研」を立ち上げ！ フットワーク軽く、これからあちこちへ出掛けてゆきますよ〜！

書かれた指示に従って、目の前のベンチに座ったり、靴ひもをほどいたり。すると、それがスイッチとなり、3秒〜30秒の小さな演劇が始まる！

日常の見方をちょっとだけ変えてくれる不思議なスイッチ、それが、スイッチ総研がつくり出す、スイッチ。です。これまでままごとの活動の一環として、象の鼻テラスや小豆島で上演されてきた、スイッチ。が、いよいよ独自の歩みを始めます。

2015年1月に、光瀬指絵所長と大石将弘副所長の二人によって立ち上げられた「スイッチ総研」は、4月末の「六本木アートナイト2015」でユニットとして初の公演を実施。六本木の商店街をはじめ、六本木の各所で、笑いとお驚きを巻き起こしました。

「スイッチ」の特徴は、老若男女誰もが気軽に、演劇というマジックを体験できること、そして誰もが気軽に演劇を、やる側になれるということです。今回は9月の「多摩1キロフェス2015」に参加予定。スイッチ総研の今後にぜひご注目ください！



大石将弘(左)と光瀬指絵

始動！



□最小の演劇による最大の挑戦！

スイッチを押すと、次も押したくなる。今度はやってみたくなり、自分でも考えてみたくなる。観ることと演じることやつくることの間にある敷居が低く、気付けば、演じる側やつくる側にまわっているのがスイッチの面白さの一つです。

人を驚かせたり笑わせたり。演じること・考えることの根源的な楽しさが詰まっているのだと思います。

スイッチは、からだ、たくらみと、小さな道具があれば、そこに演劇的な空間を生み出すことができます。この最小の演劇を使った、最大の挑戦を、スイッチ総研として続けていきます。どうぞよろしくお願いします。(大石将弘)

読むともっと観たくなる

『わが星』ウェブサイトをチェック！

今回の『わが星』公式ウェブサイト、もうご覧になりましたか？ ページを開いて、まずどかんと目に飛び込んでくるのは、チラシと同じ、写真家・濱田英明さんによる夜空の風景です。この風景、実はままごとが何度か訪れたのも、小豆島の坂手港をとらえた一枚なんです。瀬戸内国際芸術祭小豆島醬の郷手港プロジェクトの公式フォトグラフィアである濱田さんは、2013・14年と小豆島で、ままごとの写真をたくさん撮ってくださいました。ちなみに、『わたしの星』(14年)の宣伝用写真を撮ってくださったのも濱田さん。高校生たちのキラキラした透明感をそのまま封じ込めた写真の数々は、『わたしの星』の作品世界を、さらに印象深いものにしてくれました。

さて、そんなステキな写真で始まるウェブサイト、実はコンテンツもすごいんです。まずはラップファンを公言する柴幸男が、気になるラッパーたちと対談するスペシャル対談企画「ことば」と「コトバ」をご紹介します。第1弾の対談相手は、柴と以前から親交のある環ROYさんです。同世代の二人、話はお互いの作品のことから、アーティストとしての姿勢の話まで、さまざまに広がりました。その一部を抜粋しますと……

環 音楽も演劇もどっちも時間芸術ではあるけど、演劇って本来は音楽ほど厳密なグリッドが引かれていないもんね。そういう意味だと『わが星』のアプローチは音楽的だっていいよね。そういう解釈で合ってる？

柴 はい。時報はまさにグリッドで、音楽でもあり、でも演劇的な時間もありと絶妙な距離感だったと思います。でも『わが星』を経



て思ったのは、役者の力だけで観客の時間をコントロールできる演技の技術というのは、やっぱりすごいということでした。「ここからテンポが変わった」という、錯覚を、俳優が生身で生み出すのが本来の演劇の力だと思います。音楽に合わせる技術もありますが、音楽に合わせて非日常の時間になるのは当たり前です。だから『わが星』のあと、音楽に演劇をあてこむこと自体にはあんまり興味なくなっただけです。



環ROY(左)と柴幸男

対談の続きはウェブサイトです！ 今後も続々と注目のラッパーが登場しますので、お楽しみに。そして、『わが星』のキャストやスタッフによる座談会も掲載中です。その一つで、ままごとのフレイヤーなど広報物全般を手掛けるセキコウさんと、再演・再々演の『わが星』公式ウェブサイトでのデザインを手掛けた井手聡太さん(CZRA)によるデザイナー対談は必見。初演ではイラストがメインビジュアルだった『わが星』が、なぜ2015年版では写真になったのか？ などなど、デザイナーならではの目線が伺える内容です。

『わが星』をさらに楽しめるウェブサイト、ぜひ一度アクセスしてみてください！

NEXT

ままごと『わが星』

◆柴幸男【作・演出】 瑞田新菜【出演】

宮永珠生【製作総指揮】 加藤仲葉【制作】

◎三鷹市芸術文化センター 星のホール

2015年5月16日【土】・6月14日【日】

◎香川県立小豆島高等学校体育館特別ステージ

2015年7月18日【土】・20日【月・祝】

www.wagahoshi.com

KUNIO12『TATAMI』

◆柴幸男【脚本】 大石将弘【出演】

◎KAT 神奈川芸術劇場 大スタジオ

2015年8月22日【土】・30日【日】

多摩1キロフェス 水上ステージ公演

ままごと『We the Japanese people』あたりし

い憲法のはな(仮)

◆柴幸男【作・演出】

◎バルテノン多摩きらめきの池水上ステージ

2015年9月19日【土】・20日【日】

多摩1キロフェス

◆スイッチ総研「多摩1キロフェススイッチ」

◎大石将弘【研究開発・出演】

◎バルテノン多摩周辺の野外

2015年9月19日【土】・20日【日】

□編集後記 今号より「ままごとの新聞」が「ままごと新聞」としてリニューアルしました。紙で読む方にもネットで読む方にも読みやすいものにしていきますので、よろしくお願いします！(熊井)